

陸自駐屯地紹介シリーズ 第30回

地理情報・航空医学の東立川駐屯地

地理情報隊・航空医学実験隊(空自) 他

駐屯地シリーズ編纂委員会

立川市を東京都西部と認識していたが、東京都全図では意外に中央近くに位置していることに気が付いた。立川市西側に位置する西多摩郡や八王子市等余り多くない市町村が広い面積を占めて広がっている。

つある。中央線は、東京への通勤通学電車区間に姿を変えたが、立川駅はその途上にあつて青梅線、五日市線、南武線、多摩モノレール線等が乗り入れ、一日中乗降客の絶えない駅となつてい

その立川市は現在、東京三多摩地区の中核都市として発展の途上を歩みつ

東京駅から快速電車で約40分で立川駅に着く。ホームから2階に上がり改札口を出ると駅ビルを南北に貫くコンコースに出る。そのコンコースを右に折れ、立川駅北口に出る。其処には、中層ビルが連なるオフィスビル、デパート、集合ビルからなる街が開け、コンコースはそのままベダストリアン

デッキで幾つかのビルの2階へと続いている。モダンなビルもあれば、商店が勝手気儘に自己主張しているビルもあり、ごった煮の観をなしていた。駅周辺の複雑に分岐している道路の内、中央分離帯にケヤキ並木が植えられた立川通りを2km程北進して右に折れ、漸くバスが行進交差できる狭い道を500m程進むと、戸建て住宅街の中に

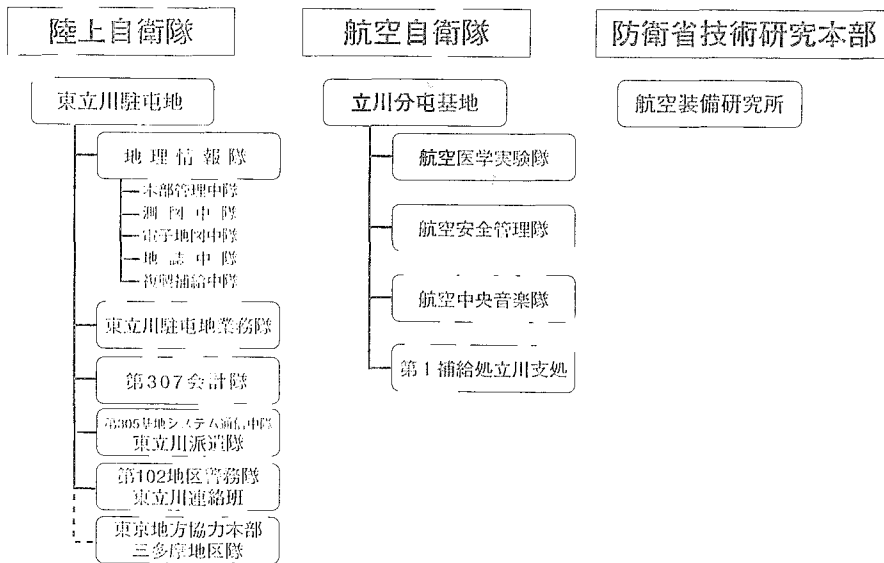


味なたたずまいの「東立川の自衛隊の正門に着く。

この場所には、昭和15年に陸軍獣医資材本廠が開設されたが、終戦とともに空き屋敷状態となった。警察予備隊発足後の昭和26年には警察予備隊武器学校、警察予備隊第502測量中隊(後の第101測量大隊の前身)が駐屯する立川駐屯地が開設された。

その後この駐屯地は昭和38年に小平駐屯地立川分屯地と名前を変え、更に昭和49年には東立川駐屯地と名前を改め、陸上自衛隊の部隊、航空自衛隊の部隊、航空自衛隊の部隊・機関、防衛省技術研究本部の研究所等が所在している。

所在部隊の編成



陸上自衛隊東立川駐屯地 航空自衛隊立川分屯基地 最初にお断りしたい 陸上自衛隊東立川駐屯地は陸上自衛隊地理情報隊他が駐屯する駐屯地であり、同じ場所に航空自衛隊第1補給処

立川支処、航空中央音楽隊、航空安全管理隊が所在して航空自衛隊立川分屯基地を名乗っている。

立川駐屯地はここから約2 kmほど西に離れた全く別の駐屯地であり、陸上自衛隊東部方面航空隊主力が駐屯している。(17年4月、シリーズ第4回に取材掲載)

取材行の日の朝はあいにく台風9号の関東地方接近で、空模様は荒れていた。時折降りつける雨を斜めにさした傘で無益に避けながら、約束の時間を待つ間、まず確かめたのは正門の門票であった。石造りの門柱に掲げられていたのは青銅製と思われる銘板に彫り込まれた「陸上自衛隊東立川駐屯地」の標示であり、門柱の右横の扉には陸空の所在部隊の名を焼き付けた銀色の銘板が懸けられていた。

これらの部隊標示を見てまず湧いたのは駐屯地・基地の業務ほどの様に分担しているのかと云う疑問であった。そこで駐屯地警備の分担について警衛隊員の服装をみると、迷彩染色を施された陸上自衛官の戦闘服装であった。後ほど、尋ねると警衛は全て陸上部隊が担当しているとのことである。他にも駐屯地、基地として必要な厚生施設の運営、営繕業務、交換所の運営など多くの業務を陸上自衛隊部隊が担当し、食堂運営は航空自衛隊所属技官

の参加を得て陸上自衛隊が主体となって運営しているとの事であった。

次に、防衛省の施設として地方公共団体との折衝担当を尋ねたところ、やや不明確な表現で陸上自衛隊が担当して居るらしい感触を得た。

駐屯地・基地としての指揮系統はどうも確立されていないようである。航空自衛隊の最先任者は空将補であるが航空部隊に關してさえ基地業務を指揮監督統制する位置については居ない。頭がこんがらかる思いがした。それでも秩序正しく運営されているのは互いに相手をおもんばかり、自己主張を控えているからなのであろう。

陸上自衛隊の部隊  
地理情報隊

この部隊の系譜は自衛隊神代時代の頃に産声を上げた第2測量中隊、第565地団中隊が統合してまず第10測量大隊となり、平成7年には中央地理隊となり、防衛省の情報態勢の総合的見直しの中で、新たな機能を加えて平成10年になって1等陸佐を隊長とする地理情報隊となる道を通った。

その任務は地図・画像等に関する専門知識を以って方面総監部、中央即応集団等の情報業務を支援することと規定されており、

- ① 主要業務は、
- ② 航空・衛星写真等の画像処理

- ③ 各種地図等の作成・補給
- ④ 各種地誌資料の作成・提供
- ⑤ 3次元地理情報の整備

- ① 本部管理中隊
- ② 測図中隊
- ③ 電子地図中隊
- ④ 地誌中隊
- ⑤ 複製補給中隊

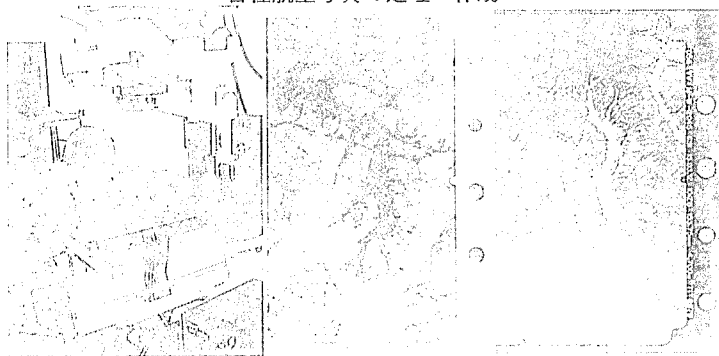
からなっている。それぞれの中隊が行う工程について、広報リーフレットの写真から読み取って見たい。

○航空写真及び衛星画像処理

リーフレットによればこの工程は本部管理中隊が行うとされている。衛星写真を基に、その優れた解像度を利用して市街図を作成する説明が読み取れるが、衛星写真の最大の利点は、地上の現状を継続的に観察し、時系列的に映像を比較して変化を察知する事にあると考える。最近の北朝鮮のミサイル実験に例を取れば、その動きは刻々と監視されていたようだ。これからすればごく幼稚な類推であるが朝鮮半島港湾の船の停泊写真や、港湾に至る要点での軍隊の集結、補給・兵站用品の集積、或いはミサイル発射基地の大規模な変化は大規模演習か軍事侵攻の準備段階として事前に察知することも可能である。このような考え方は導入されているか、地理情報隊レベルが情報本部レ

ベルなのかを尋ねようとしたが止める事にした。広報班員として答えられる事ではあるまいし、元自衛官として活字にしてよいと確信が持てることではない。ただ云えることはこの情報収集活動がわが国の防衛には絶対必要なこと、比較的時間を要する地図作製業務とは比較にならない処理速度を要する工程であること、監視する担当者は鋭敏な情報センスを要求される筈である。この中隊の衛星写真に関する業務

各種航空写真の処理・作成

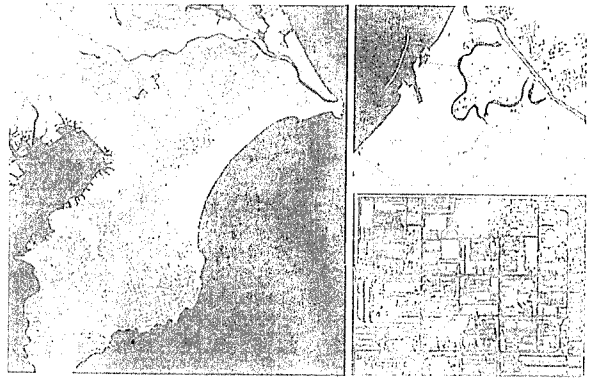


写真処理作業

航空写真フィルム

航空写真

各種衛星画像の処理・作成



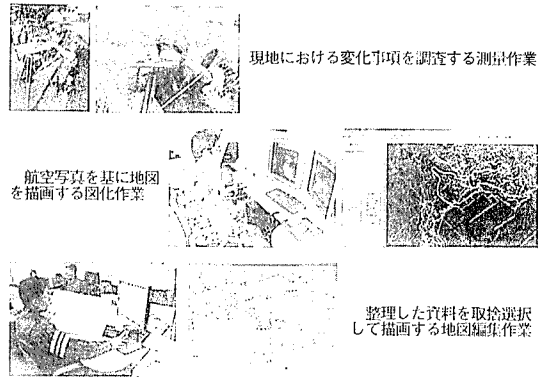
が科学技術の最先端にあることを期待したい。

航空写真は、情報活動の過程で写真のまま使い、或いは地図作成の資料として使用される。なおインターネット資料によれば、我が国の地図作成用の航空写真撮影は海上自衛隊徳島航空隊が担当しているとのことである。

○紙地図作成工程

この工程は測図中隊及び複製補給中隊の担当であり、測図中隊が担当する現地に於ける測量作業、航空写真を基に地図を描画する図化作業、これらの資料の整理、整理した資料を取捨選択して描画する地図編集作業等に続く複

紙地図作成工程

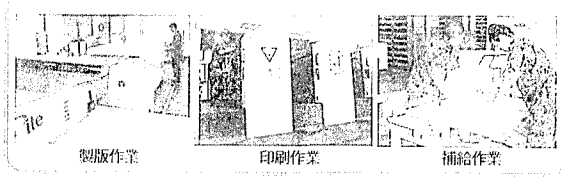
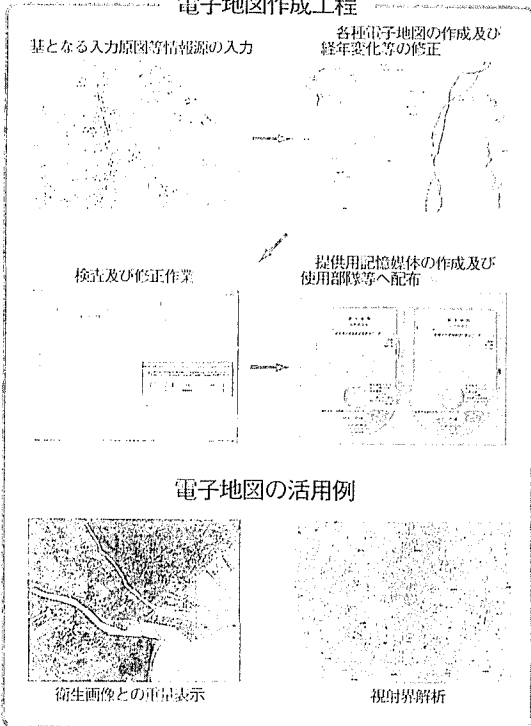


製補給中隊が担当する製版作業、印刷作業、補給作業の工程からなっている。

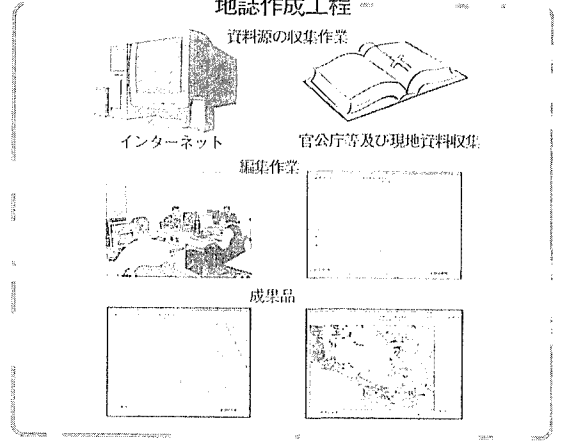
○電子地図作成工程

近年、司令部、指揮所等のディスプレイは一段とコンピューター化されている様だ。地図も例外ではない。その前提となるのが、コンピューター化された地図資料の媒体である。基礎となる原図を入力し、経年変化等を入力して修正して各種電子地図を作成し、検査・修正を加えて提供用媒体を作成し使用部隊に送付する。使用にあたって衛星画像等と重畳表示して、視界射界図等として取り出し指揮運用に活用出来るのである。

電子地図作成工程



○地誌作成工程  
この工程は地誌中隊の担任であり、インターネットや官公庁資料から既存の地図を編集し、成果図を得る工程である。これにより新しい地図を編集し或いは兵要地誌資料を地誌作成工程



◎3次元地理情報作成情報

デジタル航空写真等から3次元化するための図化作業を行うものであり、地誌中隊の担当する工程とされているが、リーフレットには更に具体的にその一例として外部写真と設計図から内部間取りまで明らかにする工程が示されている(写真説明省略)。この工程の現在の態勢・能力・業務の実例について広報班員に詳しく質問しようとしたが、出だして質問はかわされてしまい、その先は、強いて問を繰り返さなかつた。微妙な事柄などを含んでいて可能性があると考えたからである。

だが、テロリズムの横行は世界的風潮であり、我が日本もその風潮の完全局外に立ち続けられるとは限るまい。万一の事態に必要となるこの工程が世界のレベルに遅れないよう常に研鑽を続けるよう期待したい。

東立川駐屯地業務隊

この駐屯地については業務の内容もさることながら、業務推進の指示系統に関心が生じてくるところである。航空自衛隊の部隊や補給所、技術研究本部など、質の変った部隊機関の所在する中で駐屯地業務のかなりの部分を担当しているが、通常の駐屯地の様に、業務隊長に対する駐屯地司令からの指揮監督系統は、一元化されないのではないかと推察するところである。

駐屯地司令たる地理情報隊の隊長は1等陸佐、航空医学実験隊長は最近まで空将補で医官、航空自衛隊航空中央音楽隊長は2等空佐、航空安全管理隊司令は空将補、航空自衛隊第1補給処立川支処長は1等空佐、加えて技術研究本部航空装備研究所長は技官又は事務官とそれぞれが考え方も違う筈であり、駐屯地の指揮官等共同は如何なる様相を呈するか尋ねて見たが定期的に開かれることとはなっていないとのことであった。

この他に陸上自衛隊の部隊・機関としては経費、調達、給与を扱う第307会計隊、通信の構成・その維持・運営及び方面指揮システムの維持・運営に当たる第305基地システム通信中隊東立川派遣隊、服務規律維持・要人警護・交通統制等を行う第102地区警務隊東立川連絡班、隊員募集・予備自衛官の招集・部外連絡協力等を行う東京地方協力本部三多摩地区隊等が所在している。

航空自衛隊の部隊等

この一連の稿は「陸上自衛隊駐屯地紹介シリーズ」となっているが、今回はここに所在する航空自衛隊の部隊・機関についても触れてみたい。それが借行社に加入されている航空自衛隊のBへの礼儀と考えるからである。

航空自衛隊第1補給処立川支処

これは組織上部隊ではなく、航空自衛隊の機関として位置づけられている。最初に記述する所以は、記述の通り所在する航空自衛隊の窓口となっているからである。その任務は航空自衛隊で取り扱う図書等の受領、保管、印刷、製本、配布を行うことである。

「図書等」を航空自衛隊の航空機、レーダー、通信機、武器・誘導弾の操作取扱説明書や各段階の整備技術指図書まで拡張して考える時、その範囲は膨大でその必要部数は極めて多量となるはず、これを索引しやすいく様に分類し、修正追加を迅速に行うなどの業務は図書館の司書業務以上の知識とシステム化された業務処理要領が必要となるに違いない。又、技術指令書の中にはそれ自体極めて高価で、高度の秘密保持を必要とするものがあることは容易に想像出来るのである。

航空医学実験隊

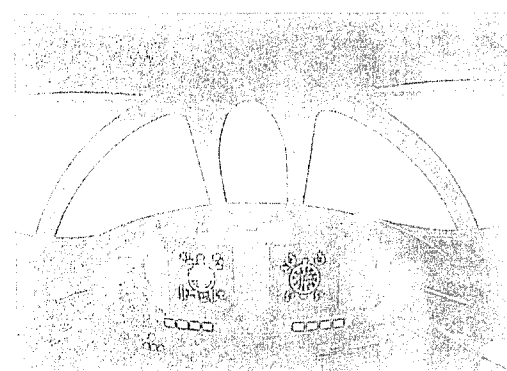
この部隊は、昭和32年11月に臨時航空医学実験隊として発足し、その後時を経て「臨時」が無くなったが、平成元年3月に航空自衛隊骨幹組織の改正により、「航空開発実験団隷下の「航空医学実験隊」として態勢を整え、現在は航空医学実験隊長と1部中2部が人間基地に移転した直後である。

航空医学及び心理学上の各種調査

研究及び実用試験

② 航空身体検査及び航空生理検査  
③ 他自衛隊、技術研究本部等への航空医学に関する技術援助

と規定されている。取材のため研究室の現場へ入ると技官、自衛官に拘わらず掲げられた名札や交わす名刺から博士、修士の称号を持った者の多いことが窺えた。また実験用、測定用のシュミレーターなどの機材が用意されていたが、目玉となる低圧実験室や、遠心力発生装置は人間基地に移転したとのことである。これ聞いて、「将来、航空医学実験隊は全勢力を人間に移す構想があるのか」と尋ねたが「分からない」との回答であった。部隊レベルでこんな質問をしたのが適切でなかつた。



操縦者作業負担度測定装置

たのかもしれない。

### 航空安全管理隊

この部隊は昭和30年代、航空機事故が続いたころ、事故防止のため安全査察を行うために臨時に編成された部署が発展して昭和57年に現在の航空安全管理隊として編成され今日に至ったものである。航空機事故が発生した場合に航空事故調査を支援し、平常時は飛行安全に関する教育等を行う事を任務としている。

従って航空機事故発生時以外はマスコミに取り上げられることは余り多くはないが平常時は部隊の飛行安全幹部の養成や安全資料の収集配布等、地味ではあるが不可欠の活動をしている部隊である。人数の少ない部隊でありながら空将補を指揮官とし、事故調査には操縦・整備・飛行支援の現場における経験が必須であることから部隊において中堅となるレベルの技量を持った人材が集められた、いわば頭でっかち部隊である。

### 航空中央音楽隊

自衛隊には三つの優れた音楽隊がある。陸上自衛隊中央音楽隊、海上自衛隊東京音楽隊、航空自衛隊航空中央音楽隊であり、国内吹奏楽団の最高峰に位置していることには疑いが無い。取材時筆者が案内された場所は、広い事務室の中央、多くの机が並んだ合間の

小さい椅子であった。決して不足なのではない。むしろ取材者にとってはまたない場所である。

並んだ机を見回した。全ての机の上の本立てがあり、殆どに薄い本が並んでいた。銀座ヤマハ等の楽器専門店の楽譜コーナーに並ぶ物と似た装丁である。もし楽譜ならば持ち主にとって大事な大事な物に違いない。座った椅子の真向かい、4路程の行事予定を書き込んだホワイトボードがあった。実に活性的である。最初に書き込んだのであろう。きちんとした字並びで書き込まれたところに後から追加・修正したと思われる文字があった。並びも、文字の大きさも、ボードメーカーの色も様々に書き込まれた跡がある。察せられるのは兎に角忙しい部隊だと云うことであった。説明によれば、年間の演奏回数には即回に達することである。

見える範囲の隊員の姿を観察した。事務室内の人影は少なかった。それでも机の上の資料に見入って顔を上げない者や、幾たびと無く部屋の出入りが繰り返されてきた。中にカジユアルな私服で出入りする人物が目止まった。頭髪を短く切り込み、日焼けした小柄な人物である。

筆者の不審げな視線に気づいたのであろう。紹介された。なんとその人物

は世界的にも評価されているユーフォニウム奏者で「国民の自衛官」として選ばれた人物であった。思わず姿勢を正し畏敬の念を込めて挨拶した。筆者はミイハーであり、それを止めるつもりはない。取材者としてでなく単なる音楽愛好家としての出会いならばサインをねだっていたかも知れない。ペルリンドイツオペラの首席オーボエ奏者から頂いたサイン入りのCDと共に飾れるところだった。惜しい事をした。

次に隊員の楽器について幾つかの質問をした。「楽器は官品ですか」。官品のそれなりの価格の楽器を購入しているが、それだけで済ませる隊員はまず居らず、私物の高級品を購入するという。その価格は乗用車とほぼ同じだという。軽ではない。ハイクラスの車の価格に匹敵する額であり、その整備費やリード・マウス・ピストンなど部品購入費を合計すると定年までに家一軒買える費用を投入する者もいると云う。そこで家族の協力が必要なことであろう。

心配になつて尋ねてみた。「引き抜かれてジャズバンドなどに転職する恐れはありませんか」。意外な答えが返ってきた。高校、音楽大学の頃から自衛隊音楽隊員として演奏する事を希望してきた者が殆どであり、その心配はしていないとの回答であった。さら

に質問した。「官品楽器の維持補修費用まで隊員の負担に甘えていることは？」。筆者も現役時代、演習用器材の創意工夫のため多くの部隊で見られた慣習であった。その回答には明言こそないものの苦しさを感じ取るものがあった。漸く近年経費が計上されることになったと返答されたが十分などという言葉はどこにもなかった。最後に心強いことを聞いた。平成3年のことである。カナダで開催された吹奏楽団の世界的競演会でその最高賞スター賞を獲得したとのこと、我が国の演奏技術のレベルが世界の最高峰に並んでいる事の何よりの証であると思える。

防衛省技術研究本部航空装備研究所ここは航空機及び航空機用機器並びに誘導武器についての研究と試験を行うことを任務としている。その詳細は控えない。

### 終わりに

この駐屯地には史料館が無く、部隊も地域との交流の機会が少ない地味な部隊であるが、いづれも不可欠な任務を整齊肅々と果たしている。この様な緑の下の力持ちを念頭に置きながら今後の各駐屯地を取材して参りたい。台風9号の関東接近の多忙な中に取材に応じて頂いた航空自衛隊の方々に感謝したい。